



◎京都大の正門前。映画では立ち上がった

描かれた大学

そして今
小説・映画・歌から

黒澤明

「わが青春に悔なし」

(1946年10月公開)

京大事件

①

思想弾圧許した反省 自由守るDN

「わが青春に悔なし」は1946年10月29日に封切られた。後に世界の巨匠となる黒澤明監督(1910~98年)が敗戦後最初に手掛けた作品で、

満州事件をキッカケとして、軍閥・財閥・官僚は(中略)国内の思想統一を自論見、彼等の侵略主義に反する一切の思想を「赤」なりとして弾圧した。「京大事件」もその一つであった。

この映画は、同事件に取材したものである(後略)。

という冒頭に流れるタイトルからも明らかのように、中国研究家の尾崎秀実らがソビエト(当時)のスパイとして逮捕・処刑されたゾルゲ事件とともにモデルになったのは、自由の府と謳われた京都帝国大(現京都大)を揺るがせた思想弾圧事件だ。

33年5月、文部大臣の鳩山一郎はその著作が危険思想である、などとして

法学部の滝川幸辰教授の免官を大学に要求。教授の進退については教授会の同意が必要、という原則を無視した強引なやり口に、同僚部の教官や学生は強く反発し、「大学の自治」「学問の自由」の危機としてその撤回を求め、辞表を提出するなど抵抗運動を繰り広げた。他学部や他大学の学生も支援に立ち上がったが、滝川の復職はかなわず、教官は退職組と残留組に分かれ、学生たちは孤立していく。

映画では、滝川を模した八木原教授を大河内伝次郎、ヒロインである八木原の娘・幸枝を原節子、そして幸枝の恋人で、尾崎秀実を連想させる学生・野毛を藤田進が演じた。事件をなぞり、物語は自由の尊さを説く八木原の罷免騒動から展開していく。スクリーンには時計台など京都大のおなじみの建物が登場し、同大学をイメージしてのことであろう「紅萌ゆる」と旧制三高の

寮歌「道遠」も何度か流れる。映画評論家で日本映画大学学長の佐藤忠男さん(85)は「黒澤は戦前、プロレタリア芸術運動に関わった。京大事件にも関心を持っていたはず」と話す。黒澤がこの作品を撮った背景には「戦争中の私は、軍国主義に対して無抵抗であった(中略)適当に迎合し、或いは逃避していた(自伝「蝦蟇の油」)という自責の念もあったろう。史実に話を戻すと、大学という閉じられた空間での運動は敗北に終わったが、文学部の学生や院生として支援した中井正一(美学)や久野収(哲学)らはその後、戦時体制が進む中、同事件の反省を糧に広く民衆に依拠した反ファシズムの同人誌「世界文化」や文化通信「土曜日」の刊行を始めるなど、これまでにない取り組みに乗り出す。

そして事件から80余年後の2015年7月1日。安倍晋三内閣の安保関連法

思想弾圧許した反省 自由守るDNAに

京大事件

「わが青春に悔なし」は1946年10月29日に封切られた。後に世界の巨匠となる黒澤明監督(1910~98年)が敗戦後最初に手掛けた作品で、

満州事件をキッカケとして、軍閥・財閥・官僚は(中略)国内の思想統一を自論見、彼等の侵略主義に反する一切の思想を「赤」なりとして弾圧した。「京大事件」もその一つであった。

この映画は、同事件に取材したものである(後略)。

という冒頭に流れるタイトルからも明らかのように、中国研究家の尾崎秀実らがソビエト(当時)のスパイとして逮捕・処刑されたソルゲ事件とともにモデルになったのは、自由の府と謳われた京都帝国大(現京都大)を揺るがせた思想弾圧事件だ。

33年5月、文部大臣の鳩山一郎はその著作が危険思想である、などとして法学部の滝川幸辰教授の免官を大学に要求。教授の進退については教授会の同意が必要、という原則を無視した強引なやり口に、同学部の教官や学生は強く反発し、「大学の自治」「学問の自由」の危機としてその撤回を求め、辞表を提出するなど抵抗運動を繰り広げた。他学部や他大学の学生も支援に立ち上がったが、滝川の復職はかなわず、教官は退職組と残留組に分かれ、学生たちは孤立していく。



映画では、滝川を模した八木原教授を大河内伝次郎、ヒロインである八木原の娘・幸枝を原節子、そして幸枝の恋人で、尾崎秀実を連想させる学生・野毛を藤田進が演じた。事件をなぞり、物語は自由の尊さを説く八木原の罷免騒動から展開していく。スクリーンには時計台など京都大のおなじみの建物が登場し、同大学をイメージしてのことであろう「紅萌ゆる」と旧制三高の



寮歌「逍遙之歌」も何度か流れる。映画評論家で日本映画大学学長の佐藤忠男さん(85)は「黒澤は戦前、プロレタリア芸術運動に関わった。京大事件にも関心を持っていたはず」と話す。黒澤がこの作品を撮った背景には「戦争中の私は、軍国主義に対して無抵抗であった(中略)適当に迎合し、或いは逃避していた」(自伝「蝦蟇の油」という自責の念もあったろう。史実に話を戻すと、大学という閉じられた空間での運動は敗北に終わったが、文学部の学生や院生として支援した中井正一(美学)や久野収(哲学)らはその後、戦時体制が進む中、同事件の反省を糧に広く民衆に依拠した反ファシズムの同人誌「世界文化」や文化通信「土曜日」の刊行を始めると、これまでにない取り組みに乗り出す。

案への反対などを訴える「自由と平和のための京大有志の会」が教職員や学生らにより産声を上げた。「生きる場所と考える自由を守り、創るために、私たちはまず、思い上がった権力に、くさびを打ちこまなくてはならない」と結ばれた声明書は、多くの人の共感を得た。安保法は9月に成立したが、「市民とともにボジティブで息の長い運動を」(発起人の一人、藤原辰史・京都大人文学研究所准教授)と、会は地道な活動を続ける。こうした姿勢に、京大事件を契機とした中井や久野らの実践ともつながるDNAを見いだすことができないだろうか。

京滋の大学、そしてキャンパスかわいは小説・映画・歌に何度も取り上げられてきた。作品を鑑賞し直すとともにその世界が今にどう息づいているか、を探る。
12回の予定で、今回は11月25日に掲載します。(永澄憲史)



① 京都大の正門前。映画では立ち上がった学生たちがこの門を出てデモに繰り出す(京都市左京区)＝撮影・船越正宏
② 「わが青春に悔なし」の1シーン。左から八木原教授、幸枝、野毛(写真提供＝東宝)
③ 緊急シンポジウムで声明書を読み上げる「自由と平和のための京大有志の会」の藤原辰史・京都大人文学研究所准教授(7月14日、京都大)

@CAMPUS @キャンパス

